

8 読者のひろば

漢詩紀行：「石神井川」

藤野 仁三*

石神井川は小平市を水源にして荒川に注ぐ全長30キロ弱の都市河川である。その川縁には東京都北区の王子から板橋にかけて桜の並木が続く。かつてこの界限には小さな滝がいくつもあり、王子七滝と呼ばれた名所であった。しかし、今はかつてのよすがをしのばせるものはなく、川筋から少し離れた公園の名前（「名主の滝」）が昔の名残をとどめているに過ぎない。

明治時代初期まではこの辺りでも水遊びができたようだ。浮世絵に滝見をする大人や川に飛び込む子供が描かれている。しかし王子に近代的な製紙工場が建ってから付近の様相がすっかり変わったらしい。

今日の石神井川は、川底を深く掘り下げ、コンクリートの護岸が続いている。そのお陰で付近の住民は川の氾濫から守られ、川岸に遊歩道が整備され四季おりおりの散策を楽しむことができるようになった。遊歩道沿いには桜の古木が林立し、枝は川面に着かんばかり伸びている。花見の季節の景観は見事で、近くの飛鳥山公園と並び春の名所となっている。

今回の漢詩は、川べりの満開の桜を見て四季の移ろいも分からなくなった故郷の老母にこの景色を見せてあげたいという気持ちを詠ったものである。

最初の二句が桜花の絢爛さを、そして後半の二句が寝たきりの母への思いを詠う。このように景と情を組み合わせるのが典型的な漢詩の構成である。題名の「即事」とは、目の前の情景に触発されて作ったという意味。しかしそれは詩題のことであって、実際には推敲に推敲を重ねて作った。

石神井川即事
 岸辺五里連綿桜
 千朶穠華倚水盛
 願届春光故里母
 多年牀上未分明

(仁三詠脚韻、桜・盛・明)

岸辺五里 連綿たる桜
 千朶の穠華 水に倚りて盛んなり
 願わくば故里の母に春光を届けん
 多年牀上 未だに明を分けず

*五里=約2.5キロ（中国の1里は約0.5キロ）だが実際の距離ではない、*千朶穠華=無数の枝先の細やかな桜花、*多年牀上=長年寝たきりでいること、*未分明=明るさが分からない、転じて季節の移ろいに気が付かないこと。



「早朝の石神井川の桜花」

*東京理科大学専門職大学院 教授